調査報告

戦国のファミリーヒストリー
津久見の堅田道閑と佐伯の大鶴宗久（そうく）

佐藤　巧
（会員　佐伯市池船町）

先日、臼杵市の小松喜久夫氏より、臼杵・津久見に存在する堅田・片田姓について問われた。また最近大分市の鳥越謙造氏から「津久見鳥越氏」という冊子を送って頂いたが、この中に堅浦の海岸寺境内にある堅田道閑の宝篋印塔が紹介されていた。一六二四（寛永元）年没としてあるから、関ヶ原の合戦から二十四年後のことである。

以前、龍護寺の佐伯氏位牌祭に北九州市から来られた御婦人がいた。夫の佐伯照雄氏が癌の宣告を受け、占ってもらったところ「先祖の霊を祀っていない」といわれ、佐伯氏の菩提寺にやって来たという。八幡西区佐伯家の屋敷の一隅には「道閑様」と呼ばれる先祖墓が祀ってあると聞いた。それを思い出して、「道閑」とは主君を失い牢人となること、武士の道を閉ざされ僧形となることを私はイメージしたのである。津久見の堅田氏は堅浦に牢人帰農し、一族郎党は片田を名乗って周辺に分布したのであろうと。また、戦国時代に堅田を名乗った佐伯一族はないので、とっさに土佐の堅田一族であるかも知れないと思った。

一、土佐国高岡郡津野荘の堅田氏

南北朝時代、土佐国高岡郡（現須崎市）に堅田小三郎、佐伯経貞という武将が現れ、守護職細川定禅の北朝軍として活躍した。その時の軍忠状や知行宛行状など十数通が「佐伯文書」として伝わり、旧「高知県史」にも紹介されているが、後世の偽作であろうと現在の学会では否定されている。しかし、この時代に堅田氏が存在したことは事実であろう。その出自は明かではないが高岡郡津野荘の地頭津野氏の一族であろうとされている。

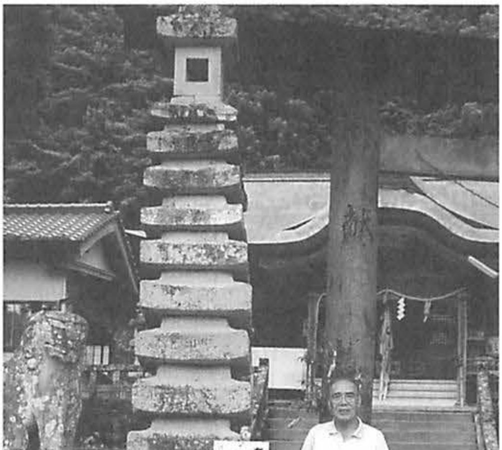
津野荘は下鴨神社の荘園で、かっては潮江荘に御厨が置かれていたという。ところが康和二年（一一〇〇）の地震津波によって海没し、その代替として津野荘が立荘

され、鎌倉末期までに津野新庄が別立したという。これら水田開発によって津野・堅田氏は一族の基盤を築いてきたのであろう。

【佐伯文書の年号と佐伯・堅田氏名】

◇佐伯・堅田氏が奉行所に宛てた軍忠状など。
◆守護細川権律師の感状や宛行状など。

◇建武三年（一三三六）　佐伯経貞
　正月～十月まで八通　※堅田小三郎経貞
◆暦応二年（一三三九）十一月　方田又三郎殿
◇同　三年（一三四〇）正月　佐伯経貞
◆同　二月～十二月まで三通　堅田又三郎殿
◇康永二年（一三四三）九月　方田又三郎（国貞）
　※国貞嫡子弥三郎討死
◆同　九月　方田又三郎殿
◆観応二年（一三五一）八月　堅田九郎二郎殿
◇永和元年（一三七五）八月　方田治部左衛門頼貞
◆康暦元年（一三七九）正月　片田治部左衛門尉殿
◆同　二年（一三八〇）三月　堅田治部左衛門尉殿
◆同　二年　三月　方田四郎五郎殿


須崎八幡社にて堅田貞志氏

室町末期には『源平盛衰記』など軍記物がベストセラーとなったが、土佐では南北朝の動乱を描いた『八幡荘伝承記』が著された。これらが刺激となって堅田氏もそのルーツを大神姓佐伯氏に求め『佐伯文書』が残されたのではないかと考えられる。津野・堅田氏は戦国時代には一条氏や長宗我部氏の旗下に降り、戸次川合戦の戦死者名簿に堅田中間の名を残している。

須崎市の堅田貞志氏（故人）は佐伯史談に「土佐の堅田氏」を寄稿され、また平成十六年に著書として刊行された。これに各流堅田氏の系譜等が詳しく収録されてい

る。その後札幌市の片田顕氏が堅田貞志氏の御教示で佐伯の地へ訪れた。本籍地は高岡郡斗賀野村（佐川町）で、祖父の代に北海道へ入植したという。本籍地にある片田神社には堅田氏系図が掲げられており、末尾に「豊州佐伯城主緒方三郎惟基より十六代の孫、片田治部左衛門は須崎にあり、その二男掃部亮が元禄年間に当地に入る」と記されていた。これは江戸末期の嘉永二年に「覚書」として八十二才の老翁伝左衛門が書写したものである。

土佐の堅田氏が果たして大神姓佐伯氏流の堅田氏であったか疑問であるが、堅田貞志氏は「大神姓佐伯氏系図」の中に堅田惟氏を殺害した弟惟光の名を見出し、彼が罪人として土佐に流されて来たと仮定した。（※実は系図の誤りで惟氏を殺害したのは惟兼である）古来から土佐は罪人の流される土地柄であった。

潜龍塔にて札幌市の片田顕氏

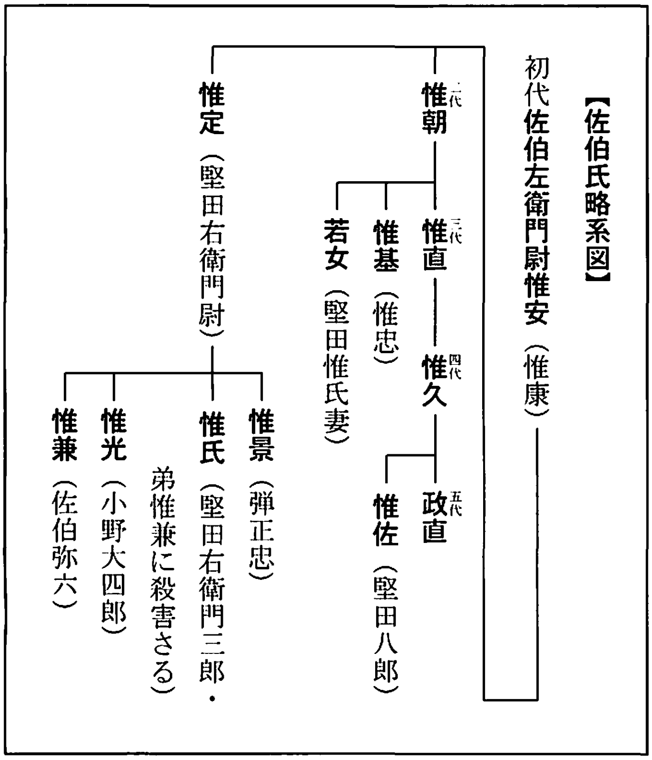
二、豊後国海部郡佐伯荘の堅田氏

佐伯荘は平安末期に皇室領として立券、『八条院領目』には戸穴荘と記され、『豊後国図田帳』には佐伯荘一八〇町の内、本庄一二〇町、堅田村六〇町とある。

佐伯氏の初代は佐伯惟康（惟安）、二代惟朝の弟惟定が堅田氏を称す。堅田惟定は兄の惟朝が早世したため三代惟直の後見人となり、堅田村の所領を我子三人に配分した。長男惟景に七町一段、次男惟氏は本家から嫁を迎え三〇町を分領して堅田氏を継ぎ、三男惟光は七町一段を分領。配分に漏れた四男惟兼が惟氏に不満を持ち殺害に及んだのであろう。

裁判の経過は伊予郡「吾川郷佐伯氏系図」附録の『裁許状』によるが、夫を殺害された妻若女は自ら京都へ赴き、弟の惟基を伴って鎌倉問注所へ直訴、堅田村三〇町の遺領を一人娘の結女に相続させることに成功した。但

し判決文を欠いているため、殺害者惟兼の処分は不明である。その後四代惟久が結女の婿となり、結女の早世によって堅田三〇町は本家に帰したのである。また五代政直のとき弟の惟佐（惟資）が代官となり堅田八郎と称す。
元来、佐伯氏本家としては堅田村に一代限りの代官として弟を派遣したつもりが、相続などで相論の種になっていたことがわかる。鎌倉問注所での裁決は総領家（長男）の立場を優先するが、また敗訴した庶子家にも替地を与える等の配慮がみられる。もし惟兼が土佐国に配流されたとすれば、鎌倉中期から南北朝時代まで二～三代が経過して堅田小三郎経貞として出現したことになる。南北朝以降の豊後では堅田次郎入道跡（史料）や堅田三郎次郎室（系図）など堅田氏の名が見えるが、やがて堅田氏の名は消滅し高畑・泥谷・塩月など小村の名主となって佐伯本家の管轄下に入ったようである。



三、堅田典薬介と大津留典薬介

ところが臼杵の小松氏から再び「大友家文書録」に記載の堅田氏のことを指摘された。
文禄三年（一五九四）に豊後を改易された大友吉統は山口に幽閉、その時の着到衆に「堅田太郎兵衛尉統教」、また吉統が山口を去る時の居残衆に「堅田典薬允」の名があり、彼らは明らかに吉統の直臣である。これまで戦国時代に堅田を名乗る佐伯一族は存在しないと思っていたので、改めてその可能性を考えてみた。
大神姓佐伯氏は由緒ある家柄を誇っていたので、嫡子は「惟」の通字を用い、大友氏から一字を拝領するのは

専ら次男であった。左の系図では佐伯惟定の弟統之（統幸）は大友吉統に属し、豊後石垣原の合戦で戦死したとある。

天正十四年の堅田合戦のとき佐伯惟定は十八才、弟の惟幸（これゆき）は老臣長田（下総入道）天楽を介添えとして初陣を飾り、その後に大友吉統の一字を拝領して統幸（むねゆき）と名乗ったらしい。或いは堅田合戦の恩賞として堅田村を拝領した可能性を考えたが憶測に過ぎなかった。

【佐伯氏略系図】

- **惟教**（佐伯紀伊介）
  ※父子三人日州高城戦死。
  - **惟真**（弾正少弼）
    - **惟定**（佐伯太郎・右京権亮）
      ※豊後改易後、藤堂高虎へ仕官。
    - **統之**（佐伯兵右衛門尉※大友興廃記では統幸）
      ※大友参議義統主に属し、慶長五年九月豊後にて討死。
  - **鎮忠**（佐伯新介）

最早手がかりは潰えたと落胆し、うらめしく『大友家文書録・高麗陣着到衆功名』の名簿を眺めていると、**大津留典薬允**の名が見え、**堅田典薬允**と同一人物ではないかとひらめいた。高麗陣に従軍したときは大津留を、大友改易後には堅田を名乗ったのではないかと。

〔大友文書録・大津留・堅田氏抜粋〕

文禄元年（一五九二）高麗陣　**大津留典薬允**
同　高麗陣　大津留主馬允
文禄二年（一五九三）朝鮮戦死　大津留又三郎
同　〔大友軍士の配属〕
黒田殿　大津留與介
福嶋殿　大津留孫七（代）
戸田殿　大津留九郎（代）
立花殿　大津留七大夫
文禄三年（一五九四）山口堪忍　**堅田太郎兵衛尉統教**
同　山口着到　大津留九郎
同　山口居残　**堅田典薬允**（御舟衆）
〔右附記〕日州東海表に於いて兄弟死去。
同　堺津残　大津留孫七

慶長五年（一六〇〇）石垣原　大津留主馬入道久固
〔浮島物語〕　大津留主馬入道久固、立石戦死。
その子九八郎、後主馬。その子守江八午、後浮島。
〔大津留氏略歴系譜〕
長男　**大友右馬允入道道珍**　先年筑前にて討死。
　室は朽網氏、その女子は柴田礼能室。
二男　**大津留主馬允入道久固**
　※石田治部少反逆の時、豊後国石垣原にて討死。
三男　**大津留六右衛門**　御屋形義統公の出頭人。

一昨年、白潟の大鶴氏が訪ねて来られ、慶長七年（一六〇二）に亡くなった元祖の墓があると言う。実は過去に一度見に行ったことを思い出した。江戸後期に建てられた新しい墓だったので当時は関心を覚えなかったが、今回改めて拝見すると台座に十三人の子孫の名が刻まれており、当時すでに分家が十戸を越えていたと思われる。また元祖墓の脇の薮の中に数十基の五輪塔が埋没し、また散乱しているのを確認したので、何度か訪れて記録し、「大友氏文書録」などから大津留氏に関する記事を年表にして報告書を作成した。

但し堅田氏については念頭になかった。昨年四月のことであったのに終わったことはどんどん忘れてしまう。大津留氏が佐伯（堅田）に居住したヒントはここにあったのである。

四、井田郷から佐伯へ牢人した大津留氏

豊薩合戦が決着した天正十五年（一五八七）に**大津留上野大夫**（こうずけ）**（井田宗久）**が伊勢大神宮御師に宛てた返書三通が記録されている。（大分県史料・朝見八幡宮文書）この文書から判断すると次の通りである。

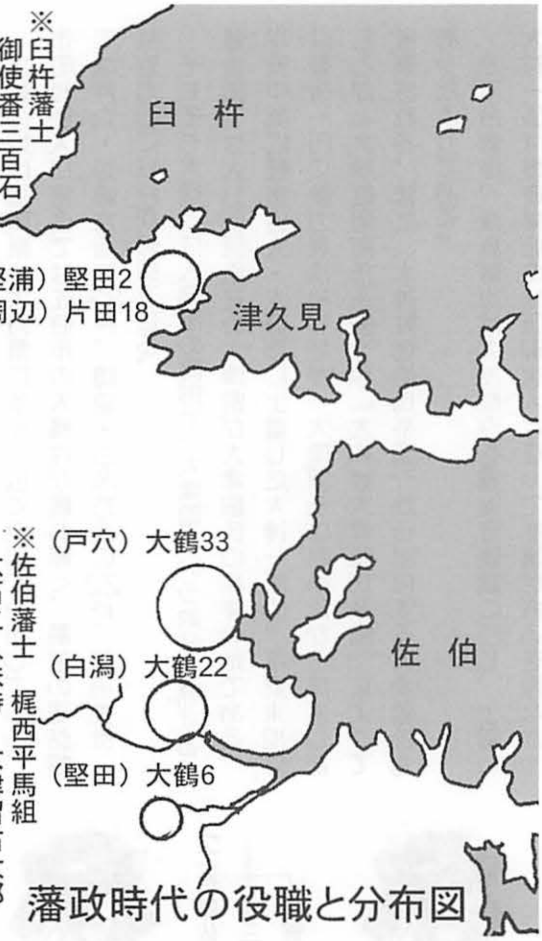
①永禄元年（一五五八）男子が立願して名代を立て銀子一貫目を進納して武運長久を祈念した。私（愚老）も銀子百目を納めた。天正九年（一五八一）私は五十九才（隠居）となったが油断なく誠精を仰ぎたい。

②貴札拝見、いよいよ御祈念を頼む。老僧以来の切紙（受取書）によれば、天正五年（一五七七）に御使が下向したとき請取書を得るべきであったが、帳面にも記載が無く、私の覚悟が足りなかったことによる。この後、一族は親子共に戦死して散々な目にあった。若輩ゆえにこのような様である。

③御祈念の御祓い三種を拝領した。不慮の弓矢（戦争）によって老体意のままにならず、当時は佐伯表に居た。帰郷したならば油断なく対応したい。

『フロイス日本史』には、永禄十二年（一五六九）井田郷（現犬飼・千歳村）の領主大津留氏（妻は田原氏）が布教に好意的であったと記録されている。その長男は宗麟の末娘を娶ったとの「大友氏系図」もある。当大津留宗久はその一族か、天正十三年に大友氏の命で島津軍の侵攻に備えて佐伯へ派遣されたのであろう。大友氏の改易後にその子孫が堅田氏を名乗り、慶長五年の石垣原合戦に再起を賭けたが敗戦、再び牢人となって津久見・佐伯に帰農、堅田姓や大鶴姓を名乗ったのであろうと。

以下に「大鶴家墓地調査報告書」を添える。



藩政時代の役職と分布図

大鶴姓の由来と語源

大鶴の姓は福岡県や大分県に多く、広く全国に分布している。市町村別人口密度では佐伯市の大鶴姓が最も高く、最近の電話帳では戸穴・海崎方面に33戸、鶴望・白潟方面に22戸、堅田長良・長谷方面に6戸が確認できる。

そもそも大鶴とは大津留の異形で、大津留という地名に発する。豊後国では大分郡阿南荘の大津留が大津留氏の発祥の地である。平安中期に豊後直入・大野郡に土着した大神一族は、平安末期には豊後一円に勢力を扶植したが、大津留氏は阿南氏から派生したことが『大神姓阿南氏系図』や『大神姓大津留氏系図』によって推察される。また『大神姓佐伯氏系図』から出自する大津留氏もあったようである。

源平合戦後、鎌倉幕府は大友能直を豊後守護職に任じ、土着の大神一族は鎌倉幕府の地頭御家人となって従属せざるを得なかった。大津留氏も小身ながら大友家臣団の一翼を担い、やがて加判衆や検使役を勤めるなど大友氏の側近として待遇されたようだ。

特に大友義鑑や義鎮の時代には九州六ヶ国の太守として、他国に遠征することも多く、派遣された土地や恩賞地も国内に留まらず一族が分散する要因となった。

弘治二年（一五五六）五月に同紋衆と他姓衆（大神一族）との騒乱が勃発、大友義鎮は臼杵丹生島城に避難、小原鑑元以下は皆討伐され佐伯惟教は伊予に脱出した。この時、大津留常陸守惟益は豊前国で討死している（大津留系図）。

【大神姓阿南氏・大津留氏系図】

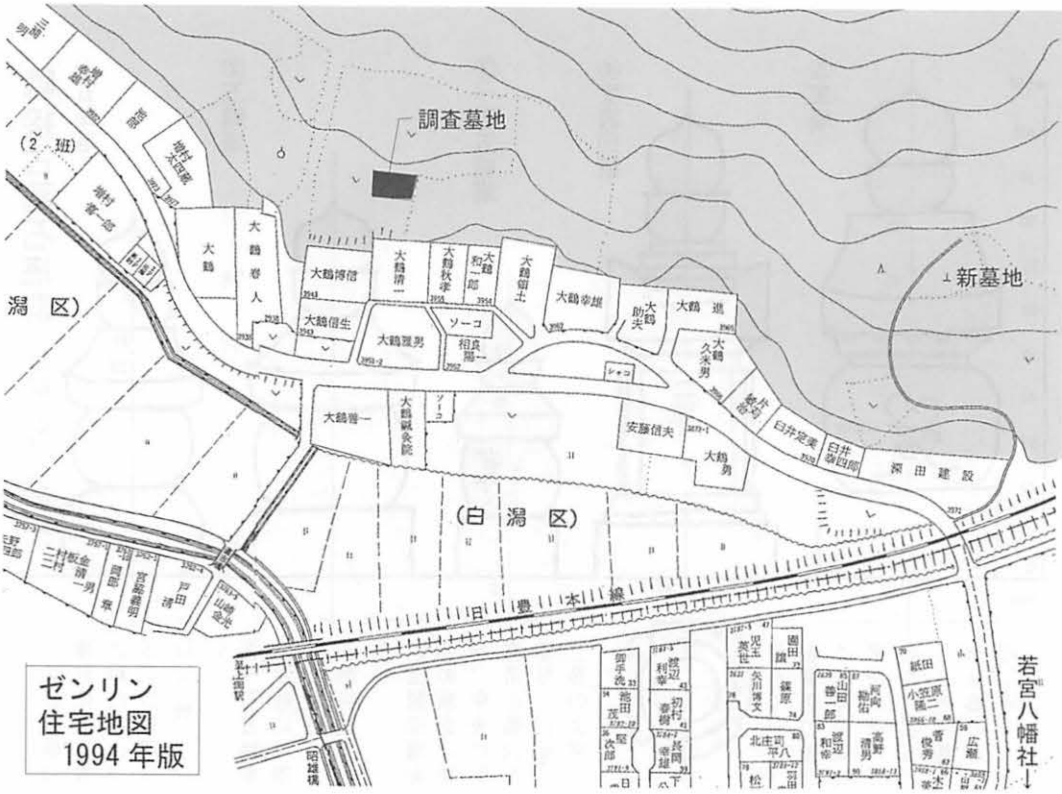
◎大神惟基 ── 阿南次郎惟秀 ── 惟房
- 惟隆　松武太郎
- 友隆　小原次郎
- 義隆　大津留二郎常陸守。
- 隆平　武宮四郎。
- 隆守　橋爪五郎

【大神姓佐伯氏系図】

- 三重惟用 ── 臼杵次郎惟隆
- 賀来惟家
  - 戸次二郎惟澄
  - 佐伯三郎惟康
    - 惟朝　佐伯左衛門尉
    - 惟定　堅田左衛門
    - 惟頼　加来四郎
    - 惟綱　大津留
    - 隆定　丹後法橋

その後、大友宗麟は宣教師の布教を支援したが、当時、海部郡井田郷（現犬飼町）の領主大津留殿は住民への布教を歓迎し、また宗麟の後妻ジュリアの娘が大津留氏に嫁いだことが「フロイス日本史」に記されている。

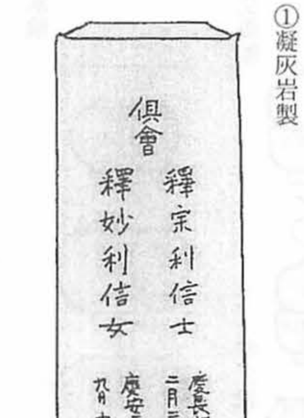
※この頃の文書の中に同一人物であるにも関わらず中津留＝中鶴・大津留＝大鶴と書いたものが見え、殊に大鶴は筑前州士であったことが判る。



大鶴氏先祖墓

①倶會　釈宗利信士　慶長七寅天（一六〇二）二月二十四日
釈妙理信女　慶安二丑天（一六四九）九月　十七日
右面　文化十一甲戌年（一八一四）
背面　大鶴新兵衛事
台座　直平　吟蔵　善平　利兵エ　要右エ門　平四郎
治兵エ　幸八　直吉　圓平　直七　太右エ門　善八

①凝灰岩製

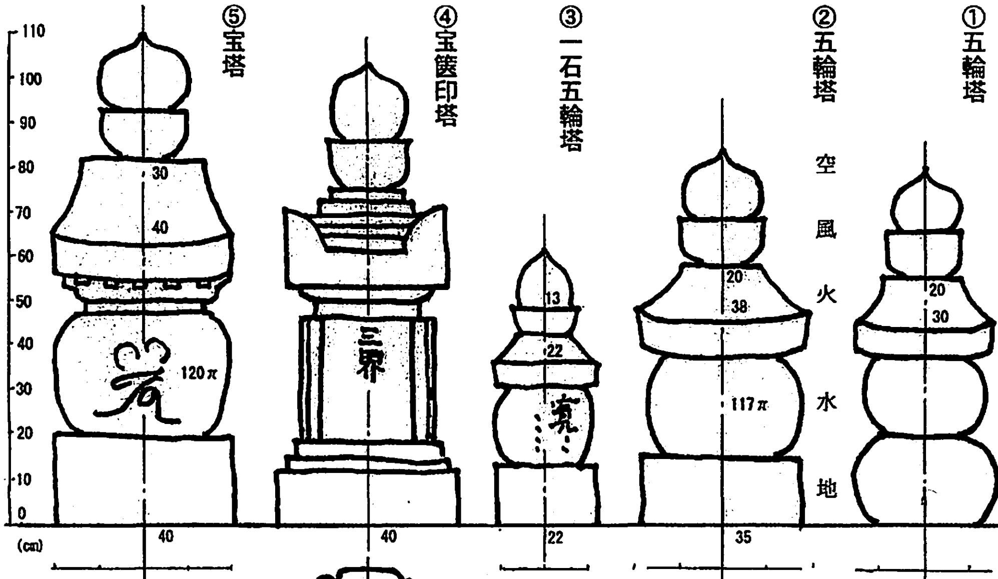


②法名釋甫安　正徳五乙未年（一七一五）三月廿二日
③法名釋尼妙英不退位　元文三戊午年（一七三八）正月廿一日
④秋月八蔵墓　伊予国北宇和郡宇和島　二百五十年期　五十八才
明治四十一年旧二月廿五日

②花崗岩製

④凝灰岩製
③砂岩製

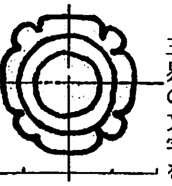
隣接古墓石塔群（凝灰岩製）前列



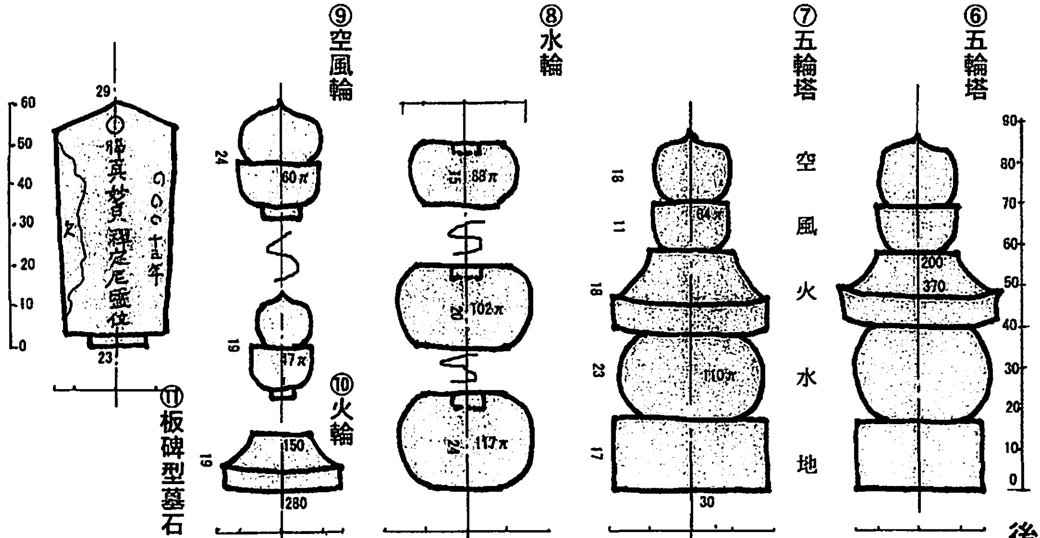
①②五輪塔は後世に組み直されたもので必ずしも部位は一致しない。

③一石五輪塔の水輪には墨書の痕跡があるが判読できない。

④宝篋印塔軸部の断面は花形、中央に納経用の筒穴を穿ち、正面に三界の文字を刻んでいる。



⑤宝塔の軸部には種子（梵字）が刻まれている。④⑤どちらも相輪を乗せるのが相応しい。



後列背後

⑥⑦五輪塔は前列の背後に組み立てられたもので、周辺には⑧水輪⑨空風⑩火輪等の部位が集積され半ば埋まっている。大小の空風輪を数えると三〇基を越える墓石群であったことが伺える。

⑪板碑型墓石は江戸初期の寛永十三年（一六三六）「帰真妙貞禅定尼霊位」とある。禅宗門である。一族の菩提を弔った最後の女性であろうか。

※大鶴氏の墓地か、あるいは大鶴氏が居住する以前の先住者の墓地か不明。